



只見町ブナセンターだより

<ごあいさつ> 例年にない暖かい11月となっております。皆様、お変わりございませんでしょうか。只見線全線運転再開から一年になりました。今年も列車でたくさんの方にお越しいただきました。ただみ・ブナと川のミュージアムでは12月2日から新しい企画展がはじまります。ご来館をお待ちしております。

===== 開 催 中 =====

【企画展】企画展アーカイブ・プラス「只見の自然を食べる！」

縄文中期に只見地域に人が住み着いて以降、今日に至るまで、只見地域の人々はこの地域の自然がもたらす恵みを食べて生きてきました。まさに、只見の豊かな自然はこの地域の人々の生活を支えてきたのです。

只見町には、豪雪の影響を強く受けた雪食(せっしょく)地形や、ブナ林をはじめとした様々な森林群集からなるモザイク植生が発達し、多様で複雑な自然環境が形成されています。こうした自然環境を背景に、人々は、春は山菜を採集し、初夏から夏にかけては川魚、秋にはキノコを採り、冬は獣を追い求めました。また、そうした食材の調理法や保存方法が工夫され、地域の食文化も育まれてきました。さらに、人々は自然の恩恵を受け一方で、それらを根絶やしにせず持続可能な形で利用してきました。こうした関係性は、昨今の私たち人類に求められている人と自然とが共生するモデル的な姿であり、未来に引き継ぐ必要のあるものです。

本企画展は、2011年に只見町ブナセンターが開催した企画展「只見の自然を食べる！」の内容に、この間に明らかにされた持続可能な資源利用に関する調査研究の成果、ブナ林の樹木を食に取り入れる新たな取り組み、「『自然首都・只見』伝承産品」の紹介などを加えて開催します。また、これらに関するおよそ100点の現物展示も行います。

私たちの生存基盤である、自然環境の大切さやそれらの持続可能な利活用について、只見の食から考えていただく機会としていただければと思いますので、ぜひ見学にお越しください。

■会期:2023年12月2日(土)~2024年4月21日(日)

■会場:ただみ・ブナと川のミュージアム 2階ギャラリー



【自然観察会】夏のバッタ観察会(河原のバッタ・草原のバッタ)

7月23日(日)・30日(日)

黒谷川の河原(7/23)と只見川堤防の草原(7/30)において、それぞれの環境に生息するバッタを中心とした昆虫の観察を行いました。町内外の親子を中心にそれぞれ12名と8名の参加がありました。

黒谷川の河原では、^{されき}砂礫河原にのみ生息するカワラバッタが観察できました。河川改修工事の影響で砂礫河原が失われ、全国的に減少が著しい絶滅危惧種です。只見では普通に見られますが、これは町内を流れる河川の幅が比較的広く、広大な砂礫河原が残るためです。

草原は場所によって植物の種類や草丈などに違いがあり、それが昆虫の生息にも影響します。只見川堤防では、ツル植物のクズが茂る環境ではキリギリス類やオオカマキリが見られました。イネ科の草本が多い環境では、草丈の高さで生息するバッタが異なり、草丈の高い環境ではイナゴモドキやナキイナゴが、草丈の低い環境ではトノサマバッタやクルマバッタモドキが見られました。植物の多様性の高さが昆虫の種類を豊富にしていることが実感できました。



▲昆虫を探す参加者



▲カワラバッタ幼虫:体色は砂礫河原に紛れる保護色。観察会当日は羽化間近の幼虫が多かった



▲オオカマキリ幼虫:終齢のオス。終齢以降はバッタ目を捕食する姿がよく見られる



▲ナキイナゴの交尾:雌雄の体格差が著しい。また、メスは翅が退化しており、痕跡的

仲秋のトンボ観察会 9月16日(日)

観察地「黒谷上野地内ビオトープ」の池(止水)と水路(流水)という異なる水辺環境で、トンボの成虫と幼虫(ヤゴ)を調べることによって、それぞれの水辺環境に棲むトンボの種類の違いを観察しました。町内の親子を中心に15名の参加がありました。

池では寒冷地性のオオルリボシヤンマが飛び交い、マユタテアカネやキトンボなどのアカトンボが多く見られたほか、東北では数少ないコノシメトンボも確認されました。たも網を用



▲参加者みんなで記念撮影

「仲秋のトンボ観察会」で撮影されたトンボや水生生物



▲キイトンボ:水草の多い止水を好み、湿地や休耕田に多い



▲オオルリボシヤンマ:寒冷地性のヤンマ。初秋によく見られる



▲キトンボ:翅まで橙色に染まるアカトンボ。晩秋まで活動する



▲オニヤンマ幼虫:細流に生息。羽化までに3~4年を要する



▲ガムシ:水草の多い止水を好む大型の水生甲虫



▲トノサマガエル:アカガエル科の一種で、通年水辺に生息する

いたヤゴ採集では、止水を好むルリボシヤンマ属やヨツボシトンボが採集されました。水路では、流れを好むオニヤンマが飛び、捕まえた子どもたちから歓声が上がっていました。ヤゴの種類も池とは異なり、ニホンカワトンボやオニヤンマが採集されました。このように、成虫・幼虫合わせて18種のトンボが見られ、池と水路での種類の違いも確認できました。その他にも、クロゲンゴロウやガムシ、ドジョウ、トノサマガエルなど様々な水生生物が採集されました。

黒谷上野地内ビオトープはヒメガマやフサモなどの水草がよく繁り、アメリカザリガニのような外来種が未定着である等、好条件が整っているため、在来の水生生物が豊富に生息しています。今回は、こうした水辺環境の大切さを実感していただける観察会になったかと思います。

【講座】雪国只見のトンボたち 11月11日(土)

企画展「只見のトンボ」関連講座として、ただみ・ブナと川のミュージアム1階セミナー室にて開催し、町民17名、県内2名、県外4名、計23名の参加がありました。企画展を担当した指導員・太田祥作が講師を務めました。

講座では、企画展で伝えきれなかったトピックスの数々一トンボの基本的な生態や、只見町を特徴付ける種、町内でも優れたトンボの生息数を誇る水辺環境、そしてトンボを守る意義について、100枚のスライドとともに説明しました。参加者からは活発な質疑があったほか、「面白かった。もっと多くの人に只見のトンボのことを知って欲しい」といった感想を頂戴しました。



▲講座の様子

【調査研究】

ツキノワグマの保護・保全調査（カメラトラップ調査）を実施

只見町にはツキノワグマが生息していますが、その詳しい生態などはわかっていません。また、人との^{あつれき}軋轢を回避し、ツキノワグマと共存していくためにも、彼らの生態を把握し、適切な保護管理を進めていくことが重要です。そのための基礎的な資料を得るために、昨年度から自動撮影カメラを用いたカメラトラップ法によりツキノワグマの生息場所や行動を調査しています。



▲カメラトラップ設置の様子

8月にトラップ設置作業を行い、今年度は昨年同様に只見町の東部地域に加え、将来、道路開通が見込まれている西部地域にもトラップを数十基仕掛けて調査しています。降雪前にトラップを回収し、撮影された動画を解析する予定です。ツキノワグマの行動は、餌資源となるブナ堅果などの豊凶の影響を受けるとされていることから、数年の調査結果からわかることは多くありませんが、継続して取り組むことが重要です。

【地域振興】

新たな「自然首都・只見」伝承産品が認証

只見町では、町内の天然資源・農産物、伝統的な技術を用いた産品を「『自然首都・只見』伝承産品」という地域ブランドとして認証しています。現在までに35品目ほどの産品が認証されており、それぞれに只見町の自然環境・伝統技術・作り手の方々のストーリーが詰まっています。

この度、新たな産品として、合同会社メーデルリーフさんの「只見の仕事着型紙（ホソユッコギ・ダフユッコギ）」と奥会津経木製作所さんの「経木」が加わりました。

仕事着型紙は、只見町の伝統的な仕事着であるユッコギという下衣を自分で作製するための型紙です。ひと昔前までは仕事着は自分で作っていて、貴重な反物を無駄にしないために直線裁ちで裁断、縫製されていました。メーデルリーフさんはこうした仕事着を伝承したいとの思いから、住民を巻き込んだワークショップを経て、現代風アレンジして型紙を完成させました。

経木は、木材を厚さ1mm以下の薄い紙状にしたものであり、包装材などとして使われていましたが、プラスチック素材が台頭するなかで製造が激減し、今は見ることも少なくなっています。一方で、時代は変わり、脱プラスチックなど環境に優しい製



▲只見の仕事着 型紙
各1,650円(税込)



▲経木 520円(税込)～

品が求められる世の中になりました。奥会津経木製作所さんは、只見町の豊かな森林資源を活かした只見ならではの商品を作りたいとの思いから町内産のアカマツを使った経木を商品化されました。従来の包装材としての利用に留まらず、自然に優しいさまざまな用途での可能性が秘められています。

これらの産品を含めた「『自然首都・只見』伝承産品」は、「ただみ・ブナと川のミュージアム」と「ふるさと館田子倉」のミュージアムショップで販売しております。ぜひご覧ください。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝ お 知 ら せ ＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

木エクラフト体験コーナーを再開

コロナ禍でお休みをしていた木エクラフト体験コーナーを再開しました。この木エクラフト体験は、ただみ・ブナと川のミュージアムの休憩室にて、体験料100円/人で行うことができます。コーナー再開にあたり、職場体験に来ていた只見高校生のIさんにレイアウトなどを手伝っていただきました。



▲木エクラフト体験コーナー

JR 只見線全線運転再開 1周年と「ふるさと館田子倉」

10月1日、JR只見線が昨年全線運転再開から1周年を迎えました。現在、JR只見線は風光明媚な路線として注目されていますが、歴史を遡れば戦後復興のための只見特定地域総合開発計画（只見川を中心とした水力発電ダム建設計画）における田子倉ダム建設資材の輸送専用線でもありました。

「ふるさと館田子倉」は田子倉ダム湖に沈んだ田子倉集落の自然や生活文化を伝える民俗資料館ですが、こうした只見線の歴史についても紹介しています。また、現在は令和4年の全線運転再開当時の新聞記事などの資料も追加したことに加え、鉄道風景写真家の大藪琢也さんが只見町に寄贈された只見線の写真も展示しています。「ふるさと館田子倉」の展示を見ていただくと、田子倉集落のかつての自然や生活文化、電源開発事業、只見線が現在の私たちの暮らしに繋がっていることを知るきっかけになると考えられます。



▲「只見線の歴史」展示の様子

只見町ブナセンターのブログ・SNS(フェイスブック)をご覧ください



■ ブログ

<http://tadami-buna.sblo.jp/>



■ フェイスブック

<https://www.facebook.com/tadami.buna>

ブログ・SNS(フェイスブック)では当センター主催のイベントの告知のほか、各種活動(自然環境の保護・保全、調査研究、地域振興など)内容の報告、只見町の自然や暮らしに関する情報を積極的に発信しています。ぜひご覧いただくとともに、お知り合いの方にも共有いただき、只見ファンを増やしていただければ幸いです。



只見町ブナセンター 令和5年度行事一覧(予定)

企画展

開催期間	タイトル	会場
2023/12/2(土) ~2024/4/21(日)	企画展アーカイブ・プラス 「只見の自然を食べる!」	ただみ・ブナと川のミュージアム 2階 ギャラリー

観察会

開催日	タイトル	集合場所
2024/2/3(土)	豪雪のブナ林観察会(仮)	詳細は後日 HP にて
2024/3/23(土)	早春のブナ林観察会(仮)	詳細は後日 HP にて

<編集後記>

11月3日は文化の日になみ、只見町の歴史、文化施設に親しんでいただきたく「ただみ・ブナと川のミュージアム」と「ふるさと館田子倉」を無料開放いたしました。また公民館主催の只見文化の日1日バスツアーがあり、たくさんの方々に見学していただきました。はじめての方もいらっしゃいました。これからもお気軽に立ち寄っていただけたらと思います。インフルエンザも流行しています。皆様、お身体に気をつけお過ごしください。(五十嵐)

発行 **只見町ブナセンター** 〒968-0421 福島県南会津郡只見町大字只見字町下 2590 番地



只見町ブナセンター



電話 0241(72)8355 ホームページ <http://www.tadami-buna.jp>

FAX 0241(72)8356 電子メール info-buna@amail.plala.or.jp

Facebook <https://www.facebook.com/tadami.buna>

附属施設「ただみ・ブナと川のミュージアム」・「ふるさと館田子倉」

開館時間:午前9時~午後5時(最終受付は午後4時まで)

休館日:火曜日(祝祭日の場合は翌平日)、年末年始(12月29日~1月3日)

入館料:高校生以上310円(20人以上は団体割引) 小・中学生210円

只見町在住の小・中・高校生 無料